

# 大学入試選抜方法と出身階層

A university entrance examination selection method and social stratification.

西 丸 良 一

## 抄 録

大学入試にはさまざまな入試形態があり、必要とされる学力の程度もさまざまである。その一方で、出身階層が学力をいくらか規定していることも事実である。では各入試形態により学生の出身階層は異なるのではないだろうか。既存調査によると、各入試形態で出身階層に違いがあり、公募推薦が出身階層をリシャッフリングする可能性、附属高校からの進学が庇護移動の性格をもつ可能性、が考えられる。

キーワード：大学入試 階層 推薦入試 附属高校進学

## 0. はじめに

学力一辺倒の大学受験を緩和するために・学力のみの選抜を軽減するために、大学入試は多様化していった。同じ大学に入学するにしても、さまざまな入試形態があり、必要とされる学力の程度もさまざまである。そうした一方で、出身階層が学力をいくらか規定していること自体も、現在では疑われることのない社会学的事実である。

では、必要とされる学力の程度がさまざまである各入試選抜を受けることで、入学してくる人たちの出身階層差はあるのだろうか。また差があるならば、あらたに考えられる観点があるのではないだろうか。

## 1. 大学入試制度の概要

教育における移行（高校→大学など）の際、必ずといっていいほど選抜が行われている。特に大学入学試験においては、先にも述べたが、

さまざまな方法で行われている。そうした大学入学試験を大きく二分すれば、一般入試と推薦入試とに分けられる。一般入試とは一言でいうならば学力一斉入試のことであり、推薦入試とは一般入試と違い、一言で説明することはできない。なぜなら、あまりにも多様化しているからである。公募推薦、指定校推薦、附属高校進学、スポーツ推薦など、さまざまな入試形態をとっている推薦入試であるが一つ共通する点がある。それは一般入試のように、その日その時に行われる試験での学力のみによる選抜でない点である。公募推薦に限っては、各大学がある程度の学力試験を課すが、高校時の内申書などを加味することから、一般入試に比べ学力を問う比重が若干軽減されているといえよう。

## 2. 大学入試制度に関する社会学的研究

このように、多様性という側面を持つ推薦入試を中村（1996）は「先進諸国における高等教育制度の発展段階の三つの段階（エリート・マス・ユニバーサル）<sup>1)</sup>」を通じて、その社会にお

ける高等教育制度の位置づけが量的だけでなく質的にも変化する」というトロウ（訳書 1976）の議論を引きついでおり、日本においてトロウの言うマス段階の時期と推薦入試制度の公認とが一致し、推薦入試制度はベビーブームによる高卒者急増という教育拡大の圧力を背景とする「マス選抜」の制度であるという。つまり、推薦入試が公平な学力一斉入試をエリート選抜で用いつつ、高等教育のマス段階への突入とともに、マス選抜である入試制度として部分的に受け入れ、成立していったのである。

マス選抜の性格をもつ推薦入試を積極的に実施している大学は、大学受験雑誌からも私立・短期大学に集中していることがうかがえる。竹内（1987：92）の研究においても、推薦入試制度が私立大学ほど、そして入学難易度が高くない大学に偏って拡大している「マス選抜」であることを示している。

他方において、推薦入試に関する研究はどのようなものがあるのであろうか。吉原（1998）は、女子には浪人忌避規範の存在が、入試戦略のなかに埋め込まれていることで現役比率が高く、男子よりも女子の推薦入試利用率を高めており、入試システムが難易度を基準にしたメリ

トクラティックなものとはいいたいという。また中村（2000）によると、個性重視の名のもとに多様化し拡大していく推薦入試は、特定の人々<sup>2)</sup>に便宜をはかる制度に拡大の余地を与えているのではないか、などの指摘から公平性の欠如が見てとれる。荻谷（2000）も推薦入試の拡大が過度な受験競争のプレッシャーを取り除くだけでなく、安易な勉学態度を高校生の間に生み出している可能性があることを次の表1から述べている。

表1 学校外での学習時間が1日当たり30分以下の生徒の割合（％）

	推薦入学	一般入試
私立4年制大学	57.4	26.7
国公立4年制大学	31.1	16.1

（志願する大学と選抜方法のクロス表）

出所：荻谷（2000）

以上のように、推薦入試は悲観的に捉えられている傾向にあるようだ。

では、出身階層の側面において、多様化した各選抜制度はどのような出身階層を持つ者によって利用されているのか。中村（1997）は入試難易度をコントロールして、家庭収入と選抜方法の関係を表2で示している。

表2 大学グループ別・家庭収入と選抜方法(%)

大学グループA				
家庭収入	1000万円以上	700～1000万円	700万円未満	実数（人）
一般入試	57.2	21.7	21.1	332
指定校推薦	0.0	0.0	0.0	0
附属高校進学	0.0	0.0	0.0	0
公募推薦	0.0	0.0	0.0	0
特別・スポーツ	0.0	0.0	0.0	0
編入	0.0	0.0	100.0	1
帰国子女	100.0	0.0	0.0	1
学士入学	25.0	50.0	25.0	4

大学グループB				
家庭収入	1000万円以上	700～1000万円	700万円未満	実数(人)
一般入試	31.1	38.4	30.4	575
指定校推薦	51.7	30.0	18.3	60
附属高校進学	78.2	10.9	10.9	55
公募推薦	18.9	32.4	48.6	37
特別・スポーツ	20.0	20.0	60.0	5
編入	20.0	35.0	45.0	20
帰国子女	80.0	20.0	0.0	5
学士入学	0.0	0.0	0.0	0
大学グループC				
家庭収入	1000万円以上	700～1000万円	700万円未満	実数(人)
一般入試	34.7	34.4	30.9	259
指定校推薦	17.8	35.6	46.6	73
附属高校進学	68.0	8.0	24.0	25
公募推薦	29.8	29.8	40.4	57
特別・スポーツ	0.0	33.3	66.7	3
編入	33.3	44.4	22.2	9
帰国子女	0.0	0.0	0.0	0
学士入学	0.0	0.0	0.0	0

出所：中村（1997）

Aグループは国公立大学のみで、一般入試での入学者がほとんどであることから、選抜方法と出身階層との関連は見ることができない。B・Cグループでは附属高校からの進学者の入学者は収入の多い階層に偏っており、一般入試以外の入学者は収入が低い傾向をうかがうことができる。Bグループでの指定校推薦については全体の傾向とは逆になっているが、多様な選抜制度は収入の少ない階層や親の学歴の高くない階層の出身者にとってどのような意味を持つのか、という課題をこうした分析により提示し、さらなる分析が必要であること（中村1997：85）を述べている。

こうした分析は、統計的に有意であるか否かは別として、一般入試以外の推薦入試などがエリート段階では大学に入りにくかった出身階層に利用されるマス選抜としての性格の一端を実証的研究においても示しているといえよう。

### 3. 問題提起

しかし表2における分析は、単に推薦入試制度がマス選抜であるという観点だけでなく、推薦入試のなかでも、出身階層の低い者が公募推薦を利用することで、よりランクの高い大学に進学できるという観点をも含んではいないか。例えば、大学グループBに入学している一般入試・指定校推薦・附属高校進学のそれぞれの家庭収入は69.5%・81.7%・89.1%が700万円以上の階層である。こうしたことは、大学グループBに入学するには、700万円以上の階層でないと入学しにくいことを示している。しかし、公募推薦で入学した学生の内48.6%が700万円未満の階層であり、公募推薦を利用すれば、収入が700万円未満の階層でも大学グループBに入学可能であることを示すのではないだろうか。

公募推薦などの一般入試以外の入試制度を積

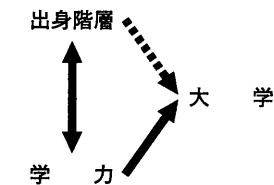


図1 一般入試利用者のモデル

極的に実施している大学は、先にも述べたように、私立を中心にした中・下位大学である。中・下位大学に比べて、上位大学の推薦入試といえば附属高校進学、つまり内部進学が多い。なぜなら私立上位大学は、必ずといっていいほど附属の高校が併設されており、そこから押し出されるようにほぼ無試験で附属大学に進学する。またこのような私立上位大学は基本的に中学校から準備されており、中学校から大学までという者も多いだろう。しかし私立中学校へ進学する者は出身階層が比較的高い子弟が多いし、高校が附属であるからもちろん附属高校に入学するであろう。大学進学の際も、他大学に進学する以外は附属高校からの内部進学となる。こうしたことは、まさしくターナーの庇護移動規範に近いのかもしれない。

もちろん、少ない募集定員率ではあるが、私立上位大学でも公募推薦制度を実施しており、公募推薦制度を経て入学している割合は無視できない。では、私立上位大学における公募推薦入試が、上位大学に入りにくかった出身階層に利用されている可能性はないのだろうか。つまり、学力・高校ランク・出身階層が低くとも、一般入試に比べて入試科目が軽減されている公募推薦を利用することで上位大学に上昇移動しているのであれば、公募推薦は、学力・高校ランクだけでなく、出身階層の側面でも上昇移動のツールになっているといえるのではないだろうか。

表1にもあるように、確かに学力テストのみで選抜する一般入試で入学してきた学生の方が、推薦入試で入学してきた学生よりも基礎学力が

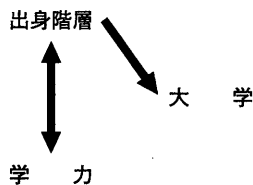


図2 附属高校進学者者のモデル

高いことは間違いないだろう。しかし、推薦入試に対する研究は悲観的なものばかりではなく、推薦入試に対する評価を肯定的に解釈する研究もある。ある医療技術短期大学部のみにおいてだが、飯田（1994）は一般入試で入学した学生よりも推薦入試で入学した学生の方が、大学における成績が高い結果が得られている。また、山口（2004）はある中堅私立大学における調査から、公募制推薦で入学した学生は不本意入学者が少なく、全体にモラルが高いこと、選抜方法が小論文や面接なので就職活動にやや類似していることから大学卒業後の進路を早期に決定できるのではないかとしており<sup>3)</sup>、大学入学試験での学力と大学における成績とは必ずしも一致しないことが考えられる。

#### 4. まとめ

本稿では、教育における高校から大学の移行の際、多様化する大学入試選抜方法と出身階層との関係に目を向けた。そこには求められる学力の程度が各入試形態で異なることから、学力と相関する出身階層にも違いがあり、公募推薦が出身階層をリシャッフリングする可能性、附属高校進学が庇護移動の性格をもつ可能性があるのではないか、というあらたな問題提起を試みた。しかし、こうした入試形態は各大学でかなり内容が異なるであろうし、その募集人数もさまざまであるので、さらに論理を具体化するには各大学における調査が必要であろう。

少子化において、小・中学生の段階で大学への学生数を確保するように生徒を青田買いしよ

うとする昨今、学力試験が軽減されつつ、多様化する大学入試選抜方法と出身階層との関係から考察することは、別の観点から大学入試選抜を探るものとして意義あるものであり、貢献できるものではないだろうか。

#### 注

- 1) ①エリート⇒高等教育システムの最初の段階。限られた少数者を対象とし、大学適齢人口の15%までとする。大学の機能はその国の支配階級の形成を行なう。
- ②マス⇒伝統的なエリート型大学制度の拡張だけでなく、多くの学生の要求に応じるため、大衆的な非エリート型へと移行する。大学適性人口の15~50%とかなり多くなるが、量的な側面だけでなく、学生の進学動機、入学選抜の機能など、質的な変化があらわれる。
- ③ユニバーサル⇒適齢人口の50%以上。高等教育への接近が義務化し、指導層の育成から産業社会への全国民の育成へとその性格が変容する。
- 2) 女子大の推薦でも論理的には同じであるが、共学において女子生徒のみが出願を許される「女子学生特別入試」が存在する。
- 3) 4年で進路決定・卒業する主な要因は、①将来志向の価値観、②学科内における豊富な友人ネットワーク、③年長者との広範囲な進路相談ネットワーク、であるとしている。

#### 参考文献

- 荒井克弘・橋本昭彦, 2005, 『高校と大学の接続——入試選抜から教育接続へ——』玉川大学出版
- 飯田義裕, 1994, 「推薦入学試験による入学生と一般入学試験による入学生との入学後の学業成績の比較」『群馬大学医療技術短期大学部』15: 1-9

- 荻谷剛彦, 2000, 「入学者選抜と「学力」問題」民主教育協会編『IDE 現代の高等教育』416号: 45-49
- 荻谷剛彦・志水宏吉, 2004, 『学力の社会学』岩波書店
- マーチン・トロウ(天野郁夫・喜多村和之訳), 1976, 『高学歴社会の大学』東京大学出版会
- 中村高康, 1996, 「推薦入学制度の公認とマス選抜の成立——公平信仰社会における大学入試多様化の位置づけをめぐる——」『教育社会学研究』第59集: 145-165
- , 1997, 「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究——選抜方法多様化の社会学的分析——」『東京大学大学院教育学研究科紀要』37: 77-89
- , 2000, 「推薦入学の現状」民主教育協会編『IDE 現代の高等教育』416号: 40-45
- 西丸良一, 2005, 「教育期間における世代内上昇・下降移動と出身階層」佛教大学大学院社会学研究科 平成16年度修士論文
- 竹内 洋, 1987, 「第6章 産業社会の選抜とディレンマ——加熱・冷却論再考——」京都大学教育学部入試検討委員会『大学入試改善に関する社会的要請の研究』: 78-104
- Turner, R, H, 1960 "Sponsored and Contest Mobility and School System," American Sociological Review, 25(5): 855-867 潮木守一訳「教育による階層移動の形態」A. H. ハルゼー他編・清水義弘監訳『経済発展と教育——現代教育改革の方向——』東京大学出版: 63-91
- 吉原恵子, 1998, 「異なる競争を生み出す入試システム—高校から大学への接続にみるジェンダー分化—」『教育社会学研究』第62集: 43-67
- 山口 洋, 2004, 「4年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か? ——ある私大での追跡調査——」佛教大学学術委員会社会学部論集編集委員会編『社会学部論集』第38号: 49-62